

第11章 剰余価値が分裂する種々の部分

司会…11章のレポーターは2回目の登場の高知県協会長の池内康宏さんです。前月担当された越智さんと事前学習をしてレポートに臨みます。それではよろしくお願いします。

利潤の配分

マルクスは、剰余価値、すなわち商品の総価値のうち労働者の剰余労働または不払い労働が実現されている部分を利潤と名付けました。しかし、その利潤のすべてが企業資本家の手元に入るわけではありません。一部は地代と

して地主に、また利子として金貸資本家に、したがって企業資本家そのものに残るのは、いわゆる産業利潤または商業利潤だけです。

また剰余価値の配分がどのような法則によって規制されるのかは、我々が考える主題ではないが、次のことを導き出すことができます。

①地代、利子、および産業利潤は、商品の剰余価値の、または商品に含まれている不払労働の、種々の部分に対する種々の名称に他ならない。そしてそれらは、等しくこの源泉から、しかもこの源泉だけから生ずる。

②それら（地代・利子・産業利潤）は、土地そのものまたは資本そのものから生ずるのではないが、土地及び資本がそれらの所有者をして、企業資本家が労働者から搾り取った剰余価値のうちから、それぞれの分前を取得することを得せしめる。

利潤は労働者から

搾り取られたもの

労働者にとっては、彼の不払い労働がどう分割されようが重要ではありません。例えば土地や資本を企業資本家

◆特集 みんなの学習講座

がすべて持つていけば、利潤はすべて企業資本家のポケットに入るだけになります。利潤（剰余価値）を直接に労働者から搾り取るのは企業資本家なのです。だからこの関係こそが、賃金制度の全体及び現存生産制度の全体の軸点であるのです。

我々の討論に参加された諸君の若干が、事態を軽視して企業資本家と労働者との間のこの根本的な関係を、第二義的な問題として取り扱おうとしたのは誤りであるのです。といつても「与えられた事情のもとでは、物価の騰貴は企業資本家、地主、貨幣資本家、および租税徴収者に対し極めて不均等な影響を及ぼすことがある」と語られたのは間違いではありません。

商品の価値のうち、原料や機械の価値（消費された生産手段の価値）は、決して何らの所得にもならないで、ただ資本を補填するに過ぎません。商品の価値のうち、所得を形成する（賃

金・利潤・地代・利子）部分が、賃金の価値、地代の価値、利潤の価値、などによって構成されるというのは間違いないのです。剰余価値（または不払い労働が実現されている部分）は、三つ（産業利潤、利子、地代）の異なった名称を有する異なった部分に分解されます。しかし商品の価値がこれら三つの構成部分からなる独立の諸価値の合計によって構成または形成されているというのは、事実の正反対です。

二つの利潤率

労働者の1日の労働時間が12時間1時間当たりの労働が6ペンス（12時間で6シリング）の価値を生むとして、1日の半分が不払労働であるとするれば、この剰余労働は商品に3シリングの剰余価値を付加することになりま

す。この3シリングの剰余価値は、企業資本家がどんな割合かほとにかく、

地主および金貸しと分配しうる総元本をなしているのです。すなわち、彼らが互いに分配すべき価値の限界をなしているのです。

決してウェストン君が主張したように、それぞれが任意の価値を付加してその合計が総価値を構成するわけではありません。だから一定の価値を三つの部分に分解することを、三つの独立の価値の合計によって、その価値を組成することと混同しているのです。

一資本家によって実現された総利潤で100ポンドに等しいならば、われわれは絶対的な大いさとして考察されたこの額を利潤額と名付けます。この100ポンドと投下された資本との比率を計算する場合は、この相対的な大いさを利潤率と名付けます。

この利潤率は明らかに二つの仕方で言い表すことができます。

①100ポンドが賃金に投下された資本と仮定し、生み出された剰余価値も

100ポンドとすれば、労働者の労働日の半分が不払労働からなることがわかる。そしてこの利潤（剰余価値）を「賃金に投下された資本の価値」によって測る場合には、利潤率（剰余価値率）は100%となる。

①を式にしたもの

$$\text{利潤率(剰余価値率)} : \frac{\text{利潤(剰余価値)100ポンド}}{\text{賃金100ポンド}} = 100\%$$

②一方、賃金に投下された100ポンドの資本だけでなく、400ポンドの原料・機械なども含めた総資本の500ポンドを持って利潤率を表す場合には、その利潤率は20%となる。

②を式にしたもの

$$\text{利潤率} : \frac{\text{利潤(剰余価値)100ポンド}}{\text{不変資本400ポンド} + \text{賃金100ポンド}} = 20\%$$

前者は支払労働と不払労働との現実の比率を、労働の「搾取」の現実の度合いを示す唯一のもので、一方後者は、普通に使われており、また実際ある種の目的のためには適当なものとなつていきます。それは資本家が労働者から無償労働を絞り取る度合いを隠すために極めて有用だからです。

マルクスは、「利潤という言葉は資本家によって搾り取られる剰余価値の総量を表すために用いる」とし、「利潤率という言葉は、賃金に投下された資本の価値によって利潤を測ること」としたのである。

利益の配分は主題とは関係ない

司会：それでは参加者の皆さんから質問をお願いします。

ON：84頁2行目に「われわれの主題にとつては全く縁遠い問題である。」とありますが、「ここでの主題は

◆特集 みんなの学習講座

何でしょうか。

池内：地代や利子など利潤の配分はとうであつても、「企業資本家が労働者から搾り取つたものが利潤・剰余価値である」ということだと思ひます。

ON：その剰余価値がどこから生まれるのか。労働者が働いたうちの不払い労働の部分であるというところが重要で、その資本家側の配分がどうであるかは直接私たちには関係がないということですね。

地代は不変資本ではないのか

NY：地代はどちらかというところ、原料などと同じように生産するために必要な不変資本に分類されるようにイメージしてしまうのですが。

須藤：生産手段というのはすべて人間労働からの生産物であるのに対し、土地はそうではないため、そこから価値は生まれません。しかし生産のために

工場を建てるためには土地が必要です。所有者から土地を借りるなりして建てるわけですが、そのために必要なのが地代です。引き続き生産を続けていくために地代を払い続けなくてはなりませんので、労働者から搾り取つた利潤

(剰余価値) から地代を支払います。生産のために銀行から借りたお金の利子利息についても同様に利潤(剰余価値) から支払います。ここで言われているのは、地代の価値、利子の価値、商業利潤の価値をも含めて商品の価格に反映されるというのは間違ひであつて、あくまで不変資本と可変資本より生まれた価値どおりに商品売ることで利潤(剰余価値) が得られ、その利潤(剰余価値) から地代と利子が支払われるということですよ。

土地や利子から価値は生まれない

OC：85頁5行目「与えられた事情

のもとでは、物価の騰貴は企業資本家地主、貨幣資本家、および租税徴収者に対し極めて不均等な影響を及ぼすことがあると語られたのは正しかったのだが。」というのはどういう意味ですか。

須藤：これは少しわかりにくい表現ですが、結局、さきほど言った土地の価値と利子の価値と産業利潤の価値を合わせたものが価格だという過ちがあつて、賃労働と資本の関係を軽視して第二義的(重要ではない・本質的ではない)にとらえていることが、おかしいと指摘しています。一方で地代とか利子とか労働者の賃金や租税にはアンバランスな面が出てくることは間違ひないということですよ。

柳本：資本に労働者は搾り取られていくということが最も重要であるにも関わらず、その関係を第二義的にとらえているということですよ。もっとわかりやすくいえば、新しい価値を生み出し

ているのは労働者の労働であって、さも土地や利子からも価値が生まれているように見せられていますが、そうではないと主張しているのです。

産業利潤と商業利潤

NY：産業利潤と商業利潤とは何ですか。

KH：産業資本家が商品を生産し、自ら全国津々浦々に売りにいければそれはそれでいいのですが、売る専門である商業資本にお願いをし、より効率的にまた売るスピードも速くすることができます。必ずしも商業資本を介するわけではないですが、より早く多く売るための手法です。当時は産業資本家のなかに商業資本家が含まれているのでこういう表現になっていますが、次第に商業資本は独立していきます。つまり、産業資本は利潤のなから地代や利子を払い、商業資本にも支払った

残りが産業資本家の得る利潤となりません。

司会：産業資本家は地代や利子を払い、かつ商品の販売を商業資本家に頼むとすれば、利潤のなから商業利潤を払わなければならなかったということですね。そして最後に残ったものが産業利潤ということですね。

柳本：市場規模が小さいうちは産業資本が自ら売っていましたが、市場が大きくなってきたことで、販売の回転を早めるために商社のような商業資本が生まれ、そこが販売をやっていくようになったわけです。

剰余価値率と利潤率

AD：若者の学習会で『経済学入門』を学習しているのですが、先週ちょうど、利潤はどこから生まれるのかという部分を学習しました。そこでも利潤率について書かれていましたが、そこ

ではレポートの①である労働者の賃金のみを基準として測る利潤率もしくは剰余価値率という方が説明されていました。今回、材料費等含む総投下資本との比率を表す資本にとつて都合の良い利潤率もあることを新たに学ぶことができました。

司会：マルクスは、実際には前者①の剰余価値率と後者②の利潤率との概念規定の区別をしていることが、88頁5行目からの注釈で書かれています。そして最後にあえて利潤率という際には、前者の剰余価値率の意味合いとして用いることにしているとします。

(次ページ図)

OC：利潤は剰余価値であるということですか。

須藤：マルクスはテキストのなかで「剰余価値、すなわち、商品の総価値のうち労働者の剰余労働または不払い労働が表現されている部分を、私は利潤と名づける」と言っていますが、厳

$$\text{剰余価値率 } m' \text{ (搾取率)} : \frac{\text{剰余価値 } m}{\text{可変資本 (賃金)} v}$$

$$\text{利潤率 } P' : \frac{\text{剰余価値 } m}{\text{可変資本 (賃金)} v + \text{不変資本 } c}$$

密には利潤はレポートにもあるように2つの意味で区別する必要があります。剰余価値を生み出したのはあくまで労働者の労働ですから、生まれた利潤は可変資本である労働力と相対して考えるべきであるということから、マルクスはこちらの部分を強調しているわけです。しかし実際は資本家が投下した原料や機械を含む投下総資本に相対して新しい価値が生み出されているという外観を取ります。これは利潤（剰余価値）が労働者の剰余労働に基づくという本質的な部分を覆い隠しているのです。

HG：最後にマルクスがまとめていますね。利潤という言葉は資本家によって搾り取られる剰余価値の総量を表すために用い、利潤率という言葉は賃金に投下された資本の価値によって利潤を測ることにすると。
司会：マルクスがウエストンの主張を科学的にどんどん論破してきているの



学習する四国の仲間

が分かりますね。次回は12章「利潤・賃銀および物価の一般的関係」です。レポートの池内さんありがとうございます。ございました。